

私たちはどうして虐待をしてしまうのか？

～毎日新聞論説委員野澤和弘氏 十文字女子学園大学地域ケアのつどい～

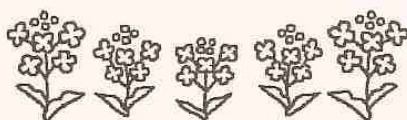
「あなたは人を傷つけたことがありますか？」、「それを自覚していますか？」と問われた。ドキッとした。ある、自覚もある…つもり。身体的暴力に限らず言葉による暴力、いじめ、パワハラ、などなど人が傷つく要素はどこにでもある。体調の悪い時、疲れている時、イライラしている時、人に辛く当たってはいないか？逆に自分が傷つき苦しんではいないか？支援者はそんな時、当事者に向き合えるのか？

障害を持つ当事者の気持ちになる、これは非常に難しい。例えば発語がない行動障害のある人に本人の希望と全く違うケアをしてしまえば、苦痛以外の何ものでもないから暴れる。しかたなく体を押さえつけてしまう。そうして「虐待」してしまう。希望していることは何なんだろう？心地良く過ごせる環境をどうやって作ればいいのか。子どもをあずけている親が「少くもいぶたれても仕方がない」と言う。自分の子がぶたれていい訳がない。本当はそんなこと思っていないのに、そうやってしまう現状って一体何なのだろう。

当事者の気持ちに近づくことのできた例をいくつか聴くことができた。重度の自閉症を持つ野澤氏の長男は、床屋に行くたび暴れていた。耳元で聞こえるハサミの音に強く反応してしまい、毎回父親が押さえつけていた。それは戦いのようだった。何軒変えても同じだった。ある時人づてに紹介された所へ行ってみた。当人が鏡の前に座ってもその理容師さんは何もしないでただ様子を見ているだけ。しばらくしてササッと散髪をしてやめる。また何もしない、またササッと散髪する。そしていつのまにかきれいに仕上がっていた。本人も「え？これで終わり？」というような表情。全く暴れることなく散髪を終えることが出来た。

特に印象に残った話。自分の頭を常に拳で殴っている人をやめさせるために、仕方なく椅子にくくり付けた。すると今度は椅子ごと移動して頭を壁にぶつけるようになってしまった。あるスタッフが「もしかしたら振動を楽しんでいるのではないか？」と音楽の振動を大きなヘッドフォンで聴いてもらったところ、「自傷行為」とされていた行動がピタッと止み、音を楽しんでいるようになったという。成功しているところに共通するのは、小さな権利侵害の内に気づき、言葉にして共有している。当事者の好きなものや希望すること、楽しみを理解し、違う視点から選択肢を拡げている。

親は子を残して先に逝く。未来に親はいない。支援する人たちに後を任せるため、虐待を防ぐために質の高い人材を一人でも多く増やさなければならない。そしてそのためには当事者も支援者も幸せである必要があるのだ。そう学んだこの研修を私は多分一生忘れない。



(ケアプランえん／須貝 恵子)